

分析的使役動詞 **make** に関する主語の有生性傾向について
- 英語母語話者と日本人英語学習者の比較 -

大和 正浩
(欧米第一課程 英語専攻)

キーワード: 英語, 無生物主語構文, 分析的使役動詞 **make**, コーパス

0. はじめに

0.1. 分析的使役用法について

分析的使役動詞とは、久野・高見 (2007: 239) によると、純粹に使役の意味を表す動詞であり、結果として生ずる出来事を表す独立した非使役述語と一緒に使役文を形成する。以下に例文を示す。

(1) The devil made me do it.

悪魔が私に (無理矢理) そうさせたのです

久野・高見 (2007: 239-240) より引用

0.2. 無生物主語構文の多用について

そして藪井 (1998) は、例文 (2) のような、概念や観念などを示す抽象的な無生物の名詞 (**his pride**) を主語に、次に使役・授与・誘導を意味する他動詞 (**allow**) を述語動詞に、そして人間を表す人称代名詞 (**him**) を目的語とするいわゆる無生物主語構文が英語において多用されていることを指摘している。

(2) His pride didn't allow him to accept the reward.

彼の自尊心が、その報酬を受け取ることを許さなかった。

藪井 (1998:13) より引用

0.3. 本調査における使役用法の定義

本調査で対象とする **make** の使役用法 (もしくは使役用法全体) とは、「**make** + 目的語 + 動詞 or 名詞 or 形容詞」という構文を指し、分析的使役用法はこのうち「**make** + 目的語 + 動詞」という構文を指すこととする。

本稿は、無生物主語構文が英語において多用されていることを踏まえ、英語母語話者と日本人英語学習者が分析的使役動詞 **make** を使用した英文における、主語の有生性の傾向を、コーパス調査を用いて明らかにすることを目的とする。本文中の例文番号、下線、図表番号、和訳は特に断りのない限り筆者による。

1. 先行研究

まず、1.1.節では英語で無生物主語が多用されていることについて考察し、次に1.2.節では make の分析的使役用法に関連したコーパス研究をとりあげる。

1.1. 無生物主語構文が許容される要因について

語順の固定化、主語の義務性、名詞化に関する先行研究をとりあげる。

1.1.1. 語順の固定化

古川 (1990: 298) は、英語では格変化の消失によって主格の認識が困難になった結果、主語が先行することが義務付けられ、語順がかなり固定化されたと述べている。そして安井 (1989: 266) は、この語順の制約のもとで、主語として人間またはそれに準ずるものが適当でない場合、主語に人間以外のものが選ばれ、それに結びつくことのできる動詞が選択されるというプロセスを経て無生物主語構文が作成されると述べている。

1.1.2. 主語の義務性

以下に金谷 (2002: 37) の記述を要約する。

英語では主語は不可欠であり、主語がなければ非文となる。しかし、日本語では英語のような主語は必ずしも義務的でない。なぜなら日本語では名詞文 (赤ん坊だ)、形容詞文 (愛らしい)、動詞文 (泣いた) という基本文において、「彼女は」のような人称代名詞がなくとも自立するからである。英語では「She is a baby. She is cute. She cried.」などと人称代名詞を補って特定しなければ自立しない。

1.1.3. 名詞化

毛利 (1975: 236) は、英語の名詞化という特徴が無生物主語の表現に密接に関係していると指摘する。すなわち、英語においては、意味の主要部分を名詞に担わせるという、名詞中心の構文が発達しているという。以下に例を示す。

(3) Her husband's sudden death caused her to give up the plan.

彼女の夫が突然死んだために、彼女はその計画を断念せざるを得なかった。

(Her husband died suddenly → her husband's sudden death)

毛利 (1975: 236) より引用、括弧内の記述は筆者による

1.1.4. 無生物主語構文が許容される要因のまとめと考察

先行研究より、英語では主語が不可欠で、さらに語順が固定されていることが大きな特徴であるとわかった。この制約が、両言語における無生物主語構文の容認度に影響しているのではないかと考えられる。すなわち、英語では制約が大きいため、「無生物が有生物に影響を及ぼす」という不自然な構文が許容されるのではないだろうか。さらに、毛利 (1975: 236) によれば英語では名詞中心の構文が発達しているが、この特徴も、「(英語で

は)主語は名詞的なもの」(毛利 1975: 237) という条件と適合するため、許容されやすいのではないだろうか。

ただし、影山 (1999: 112) が述べているように日本語でも「釣り (←釣る)、遊び (←遊ぶ)」のように動詞は名詞化するため、名詞化のみが無生物主語構文と密接な関わりにあるのではなく、英語における語順の固定化と主語の義務性という性質とも相まってそのような構文が発達しているのではないかと考える。

1.2. コーパスを使用した、make に関する研究 (Altenberg and Granger 2001)

・論文について

この研究は、外国語として英語を学習する (English as a Foreign Language) 学生と英語母語話者が、書き言葉において高い頻度で使用する動詞の傾向について、両者を比較する目的で、コーパスを用いて調査を行っている。この研究で対象とされているのは、フランス語とスウェーデン語をそれぞれ母語とする学生、そしてアメリカ人の英語母語話者である。さらにそれらの動詞の中でも特に頻度の高い **make** について、使用傾向を詳しく分析している。本稿では、その調査結果から分析的使役用法を中心にまとめる。

・使用しているコーパス

ICLE (International Corpus of Learner English)

このコーパスは、ブルガリア語、中国語、チェコ語、フィンランド語など、合計 16 ヶ国語がそれぞれ母語であり、英語のレベルが中上級から上級の英語学習者の意見作文からなるコーパスである。Altenberg and Granger (2001) では、このうちフランス語母語話者とスウェーデン語母語話者のデータを用いて調査を行っている。

LOCNESS (Louvain Corpus of Native English Essays)

このコーパスは、英語を母語とするアメリカ人学生の意見作文からなるコーパスである。

全ての作文は、専門的でない様々なトピックについてであり、文章の形式や話題の範囲は似通っている。以下に、原文に基づいて筆者がまとめたコーパス情報を載せる。

表 1: Altenberg and Granger (2001) の調査のコーパス情報

	ICLE (スウェーデン語母語)	ICLE (フランス語母語)	LOCNESS (英語母語)
1 ファイルあたりの語数	約 600	約 600	約 800
ファイル数	296	285	207
総語数	169,608	169,190	168,325

・調査方法

make を検索し、その結果を WordSmith Tools というコンコーダンス分析ソフトを用いながら手作業で分析している。この研究では make の使役以外の用法も分類しているが、ここでは紙面の都合上、本稿で参考とする使役用法のみを載せる。

・結果

Altenberg and Granger (2001) の結果を、make の分析的使役用法を中心に整理して載せる。

表 2: make の使役用法の個数と割合

	ICLE (スウェーデン)	ICLE (フランス)	LOCNESS
分析的使役用法	125 (38.23%)	67 (38.51%)	80 (33.90%)
分析的使役用法以外	202 (61.77%)	108 (61.50%)	156 (66.10%)
使役用法全体	327 (100%)	174 (100%) ¹	236 (100%)

表をみると、スウェーデン語母語話者は使役用法をフランス語母語話者、英語母語話者よりも頻繁に使うことがわかるが、Altenberg and Granger (2001) はこの原因として母語の影響を挙げている。すなわち、スウェーデン語には make it (im)possible (for sb) to ~と make it easy / easier (for sb) to ~とに逐語的に対応する表現があるため、この表現を頻繁に使用しており、結果として全体の頻度が高くなったのであろうと説明している。

2. 本調査のねらい

英語では無生物主語構文が日本語と比べて多用されているということは 1.1.節の先行研究から推測されるが、コーパスなどを用いてそれを実証した研究は管見の限り見当たらない。本稿では分析的使役動詞 make について、英語母語話者と日本人学習者が実際にどのように使用するかについて、主語の有生性傾向に焦点を当てて調査することを目的とする。

3. 調査

・使用するコーパス

NICE (Nagoya Interlanguage Corpus of English)

日本語を母語とする大学生または大学院生の英語学習者による意見作文からなるコーパスである。作文は 1 時間で辞書などの参考書を使用しないで書くことが条件として設定されている。より詳しくは杉浦 (2011) を参照されたい。

LOCNESS (Louvain Corpus of Native English Essays)

Altenberg and Granger (2001) も使用している。英語を母語とするアメリカ人学生の意見作文からなるコーパスである。

¹ 合計数は 175 になるはずであるが、数字は原文のまま引用した。

表 3: 本調査で使用するコーパス情報

	NICE	LOCNESS
1 ファイルあたりの語数	約 350	約 800
ファイル数	342	176
総語数	115,930	150,591

・対象とする使役用法の定義

0.3. で述べたように、**make** の使役用法全体とは、「**make** + 目的語 + 動詞 or 名詞 or 形容詞」という構文を指し、分析的使役用法はこのうち「**make** + 目的語 + 動詞」という構文を指す。

・調査方法、分類基準

まずコーパスのコンコーダンス分析ソフト AntConc で **make** を検索し、検索結果の中から使役用法全体を手作業で抜き出した。次にそれぞれについて主語、目的語を3通りに分類した(次項で詳述)。これらの分類をもとに、使役用法全体の場合と分析的使役用法のみの場合について表を作成し、結果を比較した。

主語、目的語の分類

主語、目的語となっている名詞の有生、無生の基準はまず角田 (2009: 41) の有生性の階層を参考にしたが、本稿の目的と簡潔さのために以下のように3段階に分類した。

- ①人間を表す代名詞 (1、2、3 人称)
- ②人間を表すその他の名詞 (親族 / 固有 / 人間 / 名詞)
- ③無生物 (自然の力、抽象名詞、地名)

主語と目的語をそれぞれ3種に分けることで、 $3 \times 3 = 9$ 通りの分類ができる。例えば主語が①1 人称、目的語が②人間を表す固有名詞の場合、①→②のように表すこととする。

迷ったもの、除外したものなど

- 人間以外を表す代名詞は、文脈から指すものを判断して②または③に分類した。
- 角田の基準によれば、本来は動物名詞も分類の対象となるはずだが、今回の調査では見つからなかったため、「人間以外の有生物」というカテゴリーは設けていない。
- school や Japan のような、人の集まりを表す名詞は、無生物とも考えられるが、意志を持つと考えられるため、②人間に分類した。
- 検索の際に出てきた hair-make や make-up といった、動詞でないものは除外した。NICE、LOCNESS とともに3例ずつあった。
- 例文 (4) のように受動態が使用されている場合は、文脈により主語がはっきりするもの

としないものがあり、基準を立てづらいため、別枠として受動態の項目を設けた。

(4) The wife in this situation is made to feel inferior, ...

この状況において、妻は自分が劣っていると感じさせられる...

3.1. 調査結果（使役用法全体：分析的使役用法含む）

分類の結果を以下の表4に示す。

表4: 使役用法全体（make + 目的語 + 動、名、形）の形の現れ

①代名詞 ②人間③無生物	NICE (学習者)			LOCNESS (母語話者)				
	個数	総数に対する割合(%)	頻度順	個数	総数に対する割合(%)	頻度順		
①→①	1	0.48	12.50	9	6	2.79	9.77	7
①→②	12	5.77		6	5	2.33		8
①→③	13	6.25		5	10	4.65		5
②→①	6	2.88	24.04	7	6	11.16	18.60	7
②→②	32	15.38		4	10	4.65		5
②→③	12	5.77		6	24	11.16		4
③→①	44	21.15	62.50	2	7	3.26	59.07	6
③→②	49	<u>23.56</u>		1	42	<u>19.53</u>		2
③→③	37	<u>17.79</u>		3	78	<u>36.28</u>		1
(受動態)	2	0.96	8	27	12.56	3		
計	208	100		215	100			

この表をみると、③無生物→{①②③}という③無生物が主語となる割合はNICE (62.50%) も LOCNESS (59.07%) も大きくは変わらない。しかし、その内訳をみると、③無生物→②人間 (下線) は大きくは変わらないが、③無生物→①代名詞 (斜体・太字) はNICEの方が、そして③無生物→③無生物 (囲み線) は LOCNESS の方が有意に多いとわかる。

3.2. 調査結果（分析的使役用法のみ）

3.1節の使役用法全体の結果のうち、分析的使役用法のみ (NICE では 76 例、LOCNESS では 64 例) について主語、目的語の有生性によって分類すると、次頁の表5のようになる。

表 5: 分析的使役用法 (**make** + 目的語 + 動詞) の形の現れ

①代名詞 ②人間③無生物	NICE (学習者)			LOCNESS (母語話者)			
	個数	総数に対する割合(%)	頻度順	個数	総数に対する割合(%)	頻度順	
①→①	1	1.32	8	2	3.13	7	
①→②	11	14.47		3	4.69		
①→③	2	2.63		7	3.13		
②→①	5	6.58	40.79	3	4.69	6	
②→②	23	30.26		1	7.81		21.88
②→③	3	3.95		6	9.38		
③→①	9	11.84	40.79	3	4.69	6	
③→②	17	22.37		2	<u>26.56</u>		54.69
③→③	5	6.58		5	<u>23.44</u>		
(受動態)	1	1.32	8	8	12.5	3	
計	76	100		64	100		

表 4 と表 5 をまず母語話者について比較すると、各カテゴリーの割合や出現頻度の傾向はほぼ同じだが、割合は後者 (表 5) では③無生物→②人間 (下線) の値が大きく、③無生物→③無生物 (囲み線) の値が大きいことが大きな違いである。このことから、**a. 母語話者は分析的使役用法の無生物主語構文において、目的語に人間を好む**ということがわかる。

学習者については、後者 (表 5) では②人間→{①②③} の値が大きく、③無生物→{①②③} の値が小さいことがわかる (斜体・太字)。このことから、**b. 学習者は分析的使役動詞 **make** を使うとき、主語に人間を好み、「無生物 + **make** + 目的語 + 不定詞」という構文を母語話者ほど使わない (使えない) ことがわかる。**

4. 調査結果とその考察

分析的使役動詞 **make** の用法について英語母語話者と日本人学習者を比較し、その数値的結果から二つの結論を導き出した。それぞれの例文をコーパスからひとつずつ載せる。

- ・ 結論 a. 母語話者は「無生物 + **make** + 人間 + 不定詞」という構文を好む。

(5) Another case and point that would make me agree with an abortion is... (LOCNESS より)

私を中絶の賛成に傾かせるもうひとつのポイントは...

- ・ 結論 b. 学習者は動詞 **make** を使うとき、主語に人間を好み、「無生物 + **make** + 目的語 + 不定詞」といういわゆる無生物主語構文を母語話者ほど使わない (使えない)。

(6) Some people use money to make people do something they want them to do. (NICE より)

人にやってもらいたいことをやらせるためにお金を使う人もいる。

これにより、1.1.1.節における、英語で無生物主語構文が多用されるという考察が調査によって証明されたといえる。

そして日本人学習者が無生物主語構文を母語話者ほど使わない (使えない) という結果 b.については、何らかの主語を立てなければならない英語に対し、日本語では主語が不要な場合には表示しなくてよいため、無生物を主語とする必要には迫られなかったからではないかと考える。

5. まとめと今後の課題

本稿では、英語母語話者と日本人英語学習者を比較したとき、母語話者の中で無生物主語構文が多用されていることをコーパス調査によって確認することができ、その違いの原因も考察することができた。

ただ、今回の調査では用例数が少ないこと、そして言語的な面のみでなく文化的な面からの理由づけができなかったことが反省点である。さらなる研究のためには、話し言葉のコーパスを調査することや、アンケート調査などを行うことが必要であると考えられる。

参考文献

(日本語で書かれた文献)

影山太郎 (1999) 「日英語の名詞化と有界性」『人文論究』49 巻 105-119. 兵庫: 関西学院大学. / 金谷武洋 (2002) 『日本語に主語はいらない -百年の誤謬を正す-』東京: 講談社. / 久野暉・高見健一 (2007) 「使役文の表す意味 -Have 使役文を中心に-」『英語の構文とその意味 -生成文法と機能的構文論-』219-271. 東京: 開拓社. / 杉浦正利 (2011) 「言語習得研究のための学習者コーパス」藤村逸子・滝沢直宏(編)『言語研究の技法』123-140. 東京: ひつじ書房. / 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語: 言語類型論から見た日本語』東京: くろしお出版. / 毛利可信 (1975) 「英語の主語と日本語の主語」『言語』4 巻 3 号 東京: 大修館書店. / 古川尚雄 (1990) 『英独比較語学』広島: 溪水社. / 安井稔 (1989) 『英語学と英語教育』東京: 開拓社. / 藪井恵美子 (1998) 「英語における<無生物主語>表現の存在理由について」『人間文化学研究集』13-21. 大阪: 大阪府立大学.

(英語で書かれた文献)

Altenberg, Bengt & Granger, Sylviane (2001) “The Grammatical and Lexical Patterning of MAKE in Native and Non-Native Student Writing” In: *Applied Linguistics* vol.22, no.2, 173-194. Oxford: Oxford University Press. / Chafe, Wallace L. (1984) “Integration and Involvement In Speaking, Writing, and Oral Literature” In: Tannen, Deborah (Ed.) *Spoken and Written Language: Exploring Orality and Literacy*, 35-53. Norwood: ALEX Publishing Corporation.

参考資料 (コーパス)

LOCNESS (The Louvain Corpus of Native English Essays) UCL. / NICE (ver. 2.2.2.) (Nagoya Interlanguage Corpus of English) 国立研究開発法人 情報通信研究機構.